

# 複線径路・等至性モデル(TEM)による断酒3年以上のアルコール依存症者の回復プロセスに関する質的研究

## —問題の意識化に着目して—

橋詰 幸輝

本研究の目的は、第1に断酒3年以上のアルコール依存症者がどのようにして自身の問題に気づいたのかを追求し、第2にその後の回復プロセスを明らかにすることである。

我が国は、アルコールに対して寛容であり、アルコールの摂取を自分の意思でコントロールできない依存症に罹患している人が約 107 万人存在している。厚生労働省は、依存症を特定の物質や行為・過程に対してやめたくてもやめることができない、ほどほどにできない状態のことでありと定義しており、アルコール依存症とはアルコールを繰り返し多量に摂取した結果、依存を形成し、生体の精神のおよび身体的機能が持続的あるいは慢性的に障害されている状態のことを指す。そのアルコール依存症を取り巻く問題は、生理的・心理的・社会的に影響を与える。

国は、「健康日本 21」の対策のなかで、アルコール関連問題の早期発見、早期介入の実現に向けて取り組みを行っている。しかし現状は、アルコール健康障害、特にアルコール依存症については、地域でのアルコール依存症の発見、介入の機能が未整備であること、治療機関の整備が進んでいないこと、アルコール依存症の病気の特徴である「否認」が相まって、治療や支援の場につながるが遅くなっていると指摘されている(田中 2017)。

アルコール依存症は他方で「否認の病気」(Illness Denial)とも言われており(豊山 2016)、本人が病識を獲得するには膨大な時間を要する。依存症者が医療機関につながるプロセスには、人間関係や依存症に対する誤った認識があり、それらは治療へのつながりを遅らせる要因になっている(岩田ら 2008)。加えて、「否認」への介入を検討するなかで、アルコール依存症者の否認と気づきの段階表を作成し、8段階の項目を作成したものもある(篠原 2009)。しかし、アルコール依存症は否認の

段階表通りに進んでいくとは限らないことから、評定を用いるには、統合的な理解が必要である。したがって、統合的理解を深めるためにも、「否認」を克服するためにはどのような介入が求められるのかをさらに深く追求する必要がある。

これまでの依存症領域における研究は主に、依存症そのものについて研究が蓄積されてきた。依存症からの回復については、自助グループの機能に着目した研究や回復プロセスに関する研究が行われており、そのなかでも、プロチャスカら(2009)のステージ理論はアルコール依存症からの回復を明らかにする上で重要な理論である。しかし、我が国では、禁煙支援の研究でステージ理論が用いられているが、アルコールの領域においてはあまり浸透していない。クライアントが位置するステージが分かれば、回復支援をより効率的に行うことができることから、ステージが移り変わる際には何が起きているのかを複合的に明らかにすることが求められる。また、依存症からの回復、特に個人の行動変容に着目した研究は少ないため、研究を蓄積していく必要がある。

以上で論じてきた課題にアプローチするために本研究では、依存症回復施設 A を利用するあるいは、利用していた断酒 3 年以上の当事者に対して半構造化面接を行った。具体的には、A 施設を利用していた且つ現在職員として勤務している男性2名、現在も A 施設を利用している男性1名、女性1名である。なお、本研究は精神障害者を研究対象としているため、立命館大学研究部が取り扱っている「人を対象とする研究倫理審査委員会」の審査を受け、承認を得てから実施した。(承認番号: 衣笠一人-2022-36) また、インタビューのデータは MAXQDA ソフトを利用し、カテゴリーごとに分類した後に、複線径路・等至性モデル(TEM) Trajectory Equifinality Model を用いて分析を行った。調査の結果より、アルコール依存症者が問題に気づくには、家族の働きかけにより医療機関につながることで、犯罪などの社会的な問題を起こすことがきっかけになることが明らかになった。また、アルコール依存症者が問題に気づく時点では、すでに身体的、心理的、社会的に見て重症度の高い状態であった。さらに、断酒を決意し実行する際には、自助グループにおけるセンス・オブ・ワンダーな出会いや体験、家族関係の崩壊、断酒そのものに失敗するなどが強く関連していた。加えて、アルコール依存症からの回復を歩んでいくなかでリラプス、スリップの経験は回復プロセスを辿っていく上で重要な分岐点になることが TEM 図より明らかになったと同時に、スリップやリラプスが起きた原因まで特定することができた。最後に、アルコール依存症からの回復過程を歩んでいくなかで、断酒を維持するためには、彼らが内面化している特有の「時間の間隔」が重要であることがわかった。断酒を維持する方法として「先を見過ぎないこと」と全員が口を揃えて語るなかで、今日 1 日という時間の感覚を基盤にしながらも、自分自身がこれからどうなっていきたいかを考え、それに向けて行動することは、彼ら彼女らの自己効力感を高め、回復を維持することに役立っていることが示唆された。

以上のことから、本研究では、ステージ理論に基づいた介入方法と家族への支援についても論述した。さらに、アルコール依存症からの回復において重要な役割を担っている回復施設での支援の

質の向上並びに専門職の養成が不可欠であることを述べた。また、地域社会においては、依存症者の早期発見・早期予防を実現するためソーシャルサポートを用いた地域ネットワークの形成を提案し、地域住民との協働を含めた人的交流の重要性を示した。最後に、政策レベルの提言として、依存症領域に対する予算の増額と学校教育における依存症予防の重要性について指摘した。

今後の課題として、サンプル数が少ないことによる一般化の難しさ、カテゴリーの分類に際して研究者の主観が入ってしまった可能性があることが挙げられた。それへの解決方法として、調査対象者の範囲を広げると同時に、量的調査を実施すること、カテゴリーのプロセスにおける主観を排除するため、エキスパートレビューを実施することを挙げる。加えて、本研究は依存症当事者を研究の対象としていたことから、依存症者を取り巻く家族の支援や介入については十分に検討することができなかった。今後の研究においては、家族支援も含め複合的に依存症からの回復について研究する。